変態奇行録

ぱじゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変態奇行録

【Ｎコード】
Ｎ９３６７Ｓ

【作者名】
ぱじゃまくんくん男

【あらすじ】
変態作者のふと思ったこと。

だいちゃんの好きなラーメン

大型連休の中日とあってか、帰路の電車は普段よりも空いていた。

とはいっても、乗車率の高い路線なので座席には座れない。

文庫本を広げられるだけでも快適。

ということで、乗換駅までぺらぺらとめくっていた。

さて、次の駅でいったん下車となる。本を畳み、棚網の鞄を引き寄せたのだけれども、ちょうど扉の前で小学四年生ぐらいの男児とその母が、ありふれた健やかな親子の明るい会話をしていた。

次の駅でその扉口をくぐるので、私はなんとはなしに、何かに楽しげな母子を視界にいれていた。

母親は四十すぎぐらいかな。痩せていて、口元のしわがちょっとした苦労をただよわせている。

子供は背中にリュックサックを背負っていて快活そうながらも、わりかし母親に甘えていた。

どこかに遊びに行っていたのか。

でも、リュックサックの脇に吊り下げている電子定期カードを見

ると、何かしらの習い事の帰りなのかもしれない。

そんなふうに下世話な詮索をしていたので、母子の会話はまったく聞いていなかった。

ただ、あと数秒で駅に到着となったとき

「だいちゃんの好きなラーメンにしよっか」

という、母親の言葉が耳に入ってきた。

私はなんだか胸にしみた。

「ラーメンにしよっか」

ではなくて

「だいちゃんの好きな」なのだ。

別になんら驚くことじゃないかもしれない。

ありふれた言葉かもしれない。

でも、私にはありふれた言葉に聞こえなかった。

母子は私が下車するのと同じ駅で同じようにホームに下りたのだけれども、階段を下りると、ホームを移る私とは別の方向、手を繋

ぎながら改札口を抜けていった。

どうしてだろう。

どうして、ありふれた言葉に聞こえなかったのだろう。

私にはまるで聞いたことのない言葉、言い回し、新鮮な響きだった。

私は身近な例を振り返ってみた。お気に入りのキャバ嬢、リオデジャネイロちゃんをご飯に誘うときの言い回しを振り返ってみた。

じゃあ、何食べる？

中華街いこうよ。

うまいレバ刺しを出す店があるんだ。

つまらない人間だなと思う。

「リオデジャネイロの好きな〇〇を食べよっか」

とは言わない。言えない。なぜなら、リオデジャネイロちゃんの好きな食べ物がなんなのかよく知らないから。

だいちゃんはラーメンが本当に好きなんだろう。

ありふれた言葉なのに、私の中では決してありふれていない言葉。

でも、一つ言えるのは、あの甘えた子供が小さい頃の私に似ていて、あの母親が会わなくなって久しい私の母親の面影に重なったことだ。

きっと、私の母もそう言ってくれていたんだろう。

「くんくん男の好きなすき焼きにしよっか」

つまらない人間だなと自分自身を思いながら、私は電車に乗った。

牛丼とチョイカワ娘

安月給の私は夕飯がたいてい自炊である。メニューはいつも決まっている。まったくといっていいほど、いつも同じ。納豆と卵とご飯。

ウウッ（涙

リオデジャネイロちゃんに注ぎ込む金が月給の４分の１ぐらいをしめている。節約をしなければ、リオデジャネイロちゃんに罵倒されてしまうので、節約……。

ただ、仕事が遅くなってしまったときは、米を炊くのが億劫になってしまう。

ということで、乗換駅の中にある牛丼屋に入り、並盛を頼む。

その日も、仕事が遅くなってしまって、牛丼屋に入った。いつもは自分と同じような境遇らしき背広族でごった返しているのだが、その日はどうしたことだか空いていた。

ほほう。むさい連中と肩寄せ合って食事をするなど、本当なら忌み嫌っている私なので、これは悠々と夕飯にありつけると思い、カウンターに腰かけた。

む。

カウンター椅子を一脚挟んだ隣に、若い女がいる。

チョイカワなんですけど。

チョイカワ娘は、私より一歩先に店に入ったらしく、

「並盛で」

と、店員に注文した。

並盛一杯ですか……。若い女の子が、むさい牛丼屋に一人、並盛一杯ですか……。なんか、哀愁を感じる。

でも、チョイカワ娘はまったく貧しそうじゃない。身なりも初夏の陽気に合った爽やかさで、派手でもなければ、地味でもない。告白されたらすぐに首を縦に振る。

哀愁なんて、姿形だけではまったく感じられない。

しかし、私は下世話な男なのだった。どうしても、彼女を意識してしまい、それでも、意識しまいと思って平然を装おう。

店員が注文は決まっていないというのに、私の前に歩み寄ってくる。まったく。この店の店員は、普段忙しいせいで、いつも無言の圧力で注文をせかしてくる。

「大盛」

私は言った。

「大盛でよろしいですか？」

「はい……」

本当はおしんこか卵か豚汁かのいずれかを頼みたかった。しかし、迷っていられなかった。私はチョイカワ娘の前で、今さら注文に迷うという愚を犯したくなかったのだ。

おれって貧乏だからさ、毎晩、ここなんだよねを、アピールしたかった。それは私からチョイカワ娘に対するささやかな愛だった。

大丈夫、チョイカワ娘ちゃん。おれはもっと貧乏だからさ！

チョイカワ娘に並盛が運ばれてくる。私はなんだか手持無沙汰。鞄のジッパーを広げ、中を覗きこんだり、背広のポケットから携帯電話を取り出してみたりと、落ち着けない。

「大盛です」

と、無愛想に牛丼を私の前に置いて行った店員。

私はチョイカワ娘を横目にちらと見る。彼女はのんびりとしていて、紅ショウガを牛丼の上に置いていっている。

私は紅ショウガをどっさりと牛丼の上に盛った。そうして、左手でどんぶりの底を手にし、右手の箸を突っ込ませた。

私は掻きこんだ。とても下品な食べ方で、とても汚い食い方で、ご飯粒をぼろぼろとこぼしながら掻きこんだ。

野良犬のようなありつきようは、チョイカワ娘へのささやかな愛であり、また、これが貧乏人の牛丼の食べ方だとチョイカワ娘に知

らしめた。

まあ、元々、早食いなのだけれど。

私は舌を顎を休めなかった。ただただ牛丼だけに立ち向かった。誰よりも早く、誰よりも汚く食べなければならなかった。

これが、これが、牛丼の食べ方だ！

ちらと横に視線を向けてみる。

む。チョイカワ娘はゴムバンドで髪を束ねはじめて、いまだ、牛丼に箸をつけていない。

お、おかしい。チョイカワ娘のその仕草は、自分をまったく卑下していない。いや、まさか、どっかのお嬢さんが好奇心だけで牛丼屋に立ち寄ったのでは……。

違う。そんな夢みたいな話があるわけない。チョイカワ娘はきっと、お父さんがリストラされてしまって、あてにしていた実家からの仕送りが滞ってしまったんだ。もしくは、銀行のキャッシュカードを落としてしまって、仕方ないから、鞄の奥底に埋もれていた三百円でなんとか今日の食事を凌いでいるんだ。

じゃなかったら、私は、馬鹿だ。

チョイカワ娘がようやく箸をつけたときに、私はどんぶりを平らげていた。おそらく、アメリカの早食い大会に出たら、入賞できる早さであった。

「ごちそうさん！」

私は声を大きくして店員を呼んだ。財布から出した五百円。これが、貧乏人の有りようだ！

君は決して自分を卑下することない！

パシャ、と、写メールでも撮影するような音が聞こえて、私ははっとした。

チョイカワ娘が、牛丼に向けて携帯電話をかざしていた。

そんな……。

今日の夕飯は牛丼並盛でしたー☆キャピ　なんていうブログでも掲載するつもりなのか……。

ウウッ。

私は逃げるようにして牛丼屋を立ち去った。

パンティ

日差しがかたむいたころに路地裏を吹きぬけていた風は、初夏のいぶきを乗せていた。

垣根のこずえを満たし彩る若葉の群れは、葉をこすりあわせていきいきと泳いでいる。

寒さを越えて、やがては暑さが来る。季節があわただしく移ろう中のほんのひとときの伸び伸びとした爽やかさ。

前から自転車に跨った女子高生がやって来る。

彼女のスカートが初夏のいぶきにひるがえった。

白いパンティか。

彼女は見られてしまったことに気付かずに颯爽と去っていったが、私はふと疑問に思った。どうして、多くの男たちはパンチラに興奮するのだろう。

たかが、パンツじゃないか。

普段は見えないものである。女性の秘部を包み隠すものだから、それを発見せしめたときは興奮してしまうのかもしれない。

でも、私は大した興奮を覚えない。

横目に、パンチラゲトーッ！　したときも、私のアドレナリン放

出量は平常値を保っていた。

なぜなら、彼女にとってパンチラッはアクシデントである。

フェロモンは皆無なのだ。

階段を登っている女子高生が短いスカートをおさえながらの場面をよく目にするけども、あれは断固としてフェロモンを発生させない表れである。

そんなノーフェロモンにたいして反応するほどの野蛮人ではない。

だが、スキニーパンツなんかにパンティラインが浮き出ている光景、あれは狂おしい。

私は発見してしまったときいつも胸のうちでひそかに叫ぶ。

「それはわざとなのかーっ！　狙っているのかーっ！」

もしも、狙っているとしたらだ、女の狙い×パンティラインから導き出されたフェロモン度は私を一瞬にして奈落の底に追い落とし、二度とパンティラインの淫らな三角闇から這い上がれることはないだろう。

さらに、ここに匂いが加わってきたら、私のアドレナリンは私の下部一本に蓄積され、公衆の面前であわれもない勃起をさらすであろう。

パンチラに興奮するかパンティラインに興奮するかが人それぞれであるように、性的嗜好も人それぞれだ。

レイプに興奮する人がいるらしいが、私はまったく駄目だ。アダルトビデオもレイプものではシコシコできない。

私は意識のうえからの相互理解がなせられていないセックスでないと、まったく快楽を覚えないのである。

だから、パンチラには興奮せず、意識的なパンティラインには勃起するのかもしれない。

「そ、そのパンティラインは狙っているのか？　ねえ、狙っているんでしょう？」

「ええ。狙っています。それにこの香りも」

「レディ、言っておくがおれは男だぜ」

「存じています」

というような相互理解の果てに私は淫らな闇のトライアングルへと朽ちていくだろう。

でっかいウンコ

人生ってのはでっかいウンコをかじっていくようなものなの。

と、私は「ミフネ」というデンマークの映画の売春婦の言葉を思い出した。

つり革につかまり、強い夜雨が車窓に打ちつけているのを眺めながらだった。

「たしかにウンコだ」

私は胸のうちでつぶやく。

もっといい暮らしをしたい。

大好きな女性に包まれたい。

将来のことがはっきりとわかればいいな。

願いはいつも際限ない。

目の前にある私の日常なんて、銀行口座はすっからかんだし、リオデジャネイロちゃんの追っかけをやっているだけだし、将来どころか明日のことでさえノープラン。

それなのに、かいがいしく夢を見ようとする。希望にすがる。生きていたらきっと何かしらあるんじゃないかと期待する。

そうやって何年も何年も人生を積み重ねてきたけど、結局は、何も変わらない。だから、落ち込む。

そんなとき、ふと、リンダが言う。

「人生なんてのはでっかいウンコで、それをかじっていくようなものなの」

そうだ。おれの人生もでっかいウンコだ。

何を期待し、何を求めているんだろう。

おれの人生だって、でっかいウンコをかじっていくようなもんじゃないか。

そう考えると、肩から力が抜けていった。頭の中でとぐろ巻きのウンコを想像すれば、いやに清々しい気分になった。

あ

過去と未来を同じ線上に置いて不満と希望を合致させると、自己の存在が安らいでくる。
もう終わり。諦めることを許されていくようで、衝動が線路に飛び込ませようとする。
大勢の人が交錯するターミナル駅。
知っている人は誰もいない。私たちは他人に何も期待しない。求めるものは一切の無関係。でも、なぜか言う。寂しい、と。
私もその一人。どこにも帰りたくない。
なにしろ私を待ってくれているのは永遠の孤独だから。
二度ときてほしくない明日。
二度と考えたくない今日。
過去と未来をひとくくりにして安らいだ私は
二度と誰とも話したくない。

ということで、
今週のＳＫＥ４８ランキングううううっ！

殿堂　松井珠理奈
（このお方は地球のためにアイドルをされている）

1位　向田茉夏（↓）
（んんんんんまなつううううううぅ。んんんんランキング死守ううううっ！　むはっむはっ）

2位　松井玲奈（→）
（久々のランク阿ぷきたよー！　まなつの牙城を崩して女王の復権なるかーーーーっ！）

3位　木崎ゆりあ（←）
（あああああっ！　息を吹き返してきたれなちゃんのあおりを食らって1rkダウーーーーン。でも、大丈夫。ちゃんとPVで注目しているから（ゝω・）vキャピ）

4位　高柳明音（←）
（れなちゃん急上昇のあおりを食らってK？キャップちゅりもあえなくダウーーーン。でもいける……K？公演さえ始まれば……再浮上もっ……）

5位　桑原みずき（↓）
（初かつお…ども…
俺みたいな中年でSKEランキングやっているキモブタくそ野郎、他に、いますかっていねーか、はは

今日の会社の会話
月末までには見込み客取ってこい　とか　来月で上半期終わるぞ
とか
ま、それが普通ですわな

かたや俺はあうのスマートフォンでパレオはエメラルドを見て、呟

くんすわ
ＪＵＲＩＮＡＴＡＮハアハア．ロリコン？それ、ＪＵＲＩＮＡには
褒め言葉ね。

好きな音楽　ＳＫＥ４８
尊敬する人間　秋元康（ＡＫＢ商法はＮＯ）

なんつってる間にＳＫＥメンバーぞくぞくとブログ更新ですよ。あ
ーあ、ＳＫＥオタの辛いとこね、これ　）

い

『皇帝』は３６歳。若い。しかし、非正規労働者からしてみると、３６の年齢は若くない。

『皇帝』は皇帝のアルバイトをしていた。

雇い主はいない。『皇帝』の先祖の皇帝には神という雇い主がいたようだった。しかし、『皇帝』は神に会ったことがないため、神に雇われて皇帝をやっているわけではない。

アルバイトなので収入はある。だが、受け取れないし、非正規労働者なので、収入の額がよくわからない。どうやら、収入額がころころと変わっているようである。そのことについて『皇帝』は不満を持っていた。非正規労働者だから、不当に扱われている、と。

世の中どうかしている。『皇帝』は思った。

なにゆえ、このような差別があるのかと。人は生まれながらに平等ではないかと。それなのに、この社会には正規労働者と非正規労働者の括りに分かれている。

だから、人々の心がすさむのだ。世を騒がすたいがいの犯罪者は皆、非正規労働者なのだ。引ったくり、強盗、猥褻、強姦、無差別殺人……。それらは不当に扱われている非正規労働者の鬱屈がはけ口を見失い、暴力に発展した結果だ。

それなのに、正規労働者は、この世の荒廃に対して無策である。むしろ、今以上に非正規労働者を苦しめようと考えている。

「朕もその一人だ」

『皇帝』は呟く。

昼中は延々と玉座に座り、侍従たちの退屈な話を聞く。ときには帝国の見聞に連れて行かれる。

夕飯は勝手に決定されている。大嫌いなローストビーフを食べなくてはならないときもある。食の自由はない。朝食も昼食もそうだ。

夜になると、寝室にいる『皇后』とセックスをしなければならな

い。とても美しく、聖母のような愛に溢れているらしいが、残念なことに淫乱ではなかった。どこからか勝手に連れてきただけの女なのである。
「非正規労働者の中でも、朕がもっとも不当なる扱いを受けているではないか」
なにしろ、２４時間、働いている。年中無休で皇帝のアルバイトに拘束されている。
「この苦しみ、誰にわかろうか」
玉座に一人たたずむ『皇帝』の声は悲愴のうちに震えていた。孤独である。ゆえに、はけ口がない。
「苦しむものは苦しむしかなく、楽するものは楽をする」
その構図は、正規労働者と非正規労働者という差別がこの世にある限り、変わることがなかろう。
「誰かが変えるべきだ」
しかし、誰も変えようとしない。変えようとする人間は差別を受けているから力がなく、変えたくない人間は正規労働者という支配者たちなのである。
「朕は一生このままだ」
と、『皇帝』は頭を抱えた。
生涯を測ってしまうと、絶望的になる。
生まれてから死ぬまでの間に、ついに幸福を感じることができないとなると、自分はどうして生まれてきたのか。
存在価値もないうえに、存在することへの意義もなくなってしまえば、もはや絶望しかない。
「ならば」
腰を上げた『皇帝』の目は据わっていた。
「朕も無差別殺人を犯そう。無いに等しい人生ならば、その無いに等しい男の手に寄って、正規労働者どもよ、苦しむがいい。そして朕を憎め。非正規労働者を憎め。しかし、その非正規労働者を作ったのは他でもないお前たちなのだ」

『皇帝』は町に出ると、まず、１００円ショップに入った。目当ての出刃包丁を手に取り、レジに向かう。しかし、足を止めた。『皇帝』は非正規労働者のため、金を持っていない。無一文である。
準備すらできないとは、なんと情けない。『皇帝』はその場に立ちすくみ、拳を震わせる。
自分を無給で働かせる正規労働者たちのせいで、無一文なのだ。
憎い。
「へ、陛下、どうされましたか」
顔を上げてみると、店員らしきエプロンをかけた女性だった。
『皇帝』は焦った。出刃包丁一品だけを手にして突っ立っているなど、よっぽど怪しかったに違いない。このままでは警察を呼ばれて、尋問を受けてしまい、それが宮中の正規労働者たちに伝わって、皇帝のアルバイトをクビにされてしまう。それこそ、もはや、何もできなくなってしまう。
「そのお品をお目当てであれば、お代金は結構でございますから」
「え？」
「結構でございます。陛下からお代を頂戴するなど、できません」
『皇帝』は店員に甘えて、出刃包丁を貰うと、１００円ショップをあとにした。
それにしても、無償で譲ってくれるとは意外だった。いや、もしや、あの女性は自分がこれからやろうとしていることを見通して、譲ってくれたのかもしれない。実はあの女性も非正規労働者なのだろう。彼女は自分に憎しみを託したのだ。
そんな『皇帝』に迷いはなかった。ただただ無心で駅前までの道のりを辿った。社会を震撼させる。自分が、この朕が。
「陛下！」
その声は宮中の正規労働者だった。『皇帝』の顔は一気に蒼白した。
正規労働者の侍従は『皇帝』のもとに駆け寄ってき、足元に膝ま

ずく。
「早くお戻りになられてください！　大変でございます！　隣国が放ったミサイルが、我が国に着弾いたしました！　早々に緊急会議を召集してくだされ！」
『皇帝』はそれを聞いたとき、無差別殺人の計画などあっさりと忘れた。早く宮中に戻らなければと思った。戦争になるかもしれないこんな事態を見逃してたまろうか。戦争になって、この国が廃墟と化せば、自分は一からやり直せるかもしれないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9367s/

変態奇行録

2011年11月17日04時11分発行